

イラン・ゴルガン地方における 企業家的農場の成立と展開

—— 先駆者的農場の一事例 ——

おか ぎき しょう こう
岡 崎 正 孝

は し が き

イランの農業は従来その進展に積極的な役割を果たさなかった地主と農民によって担当されてきた。地主がそうであったと同様に、政府も農業の発展に対して意欲的ではなく、その結果、農業は停滞を保っていたのである。しかし、近年——とくに1958年以降——カスピ海東岸のゴルガン地方において、地主、商人、政治家、官吏、王室関係者などによる農場設立が活発になった。これらの農場は、従来の経営法とは完全に異なり、企業家的に経営されているが、このような農場の出現、またその経済活動は強いインパクトとなり、従来停滞的であったこの地方の農業を大きく変容させている。

企業家的農場は、現在、ゴルガン地方のみに顕著にみられ、他の地方ではいまだ例外的であるが、テヘラン近郊、マシュハッド(Mashhad)、フゼスタン(Khuzestan)などの地方では、ゴルガンの農場をモデルにした農場が誕生しつつある。

筆者はイラン滞在(1961年3月から63年9月)の後半「農業機械化の進展」と「企業家的農業経営の展開」を研究の中心課題としてきた。とくにゴルガン地方における企業家的農場の展開に関心を

もち、この地方を中心に調査を行なった。この調査については追って別に報告書をまとめる予定であるが、ここでは企業家的農場の輩出を促す先駆者的役割を果たしたマハダヴィ農場(Mahdavi)の成立、展開を事例として紹介し、後に発表する報告書のプロローグとしたい。

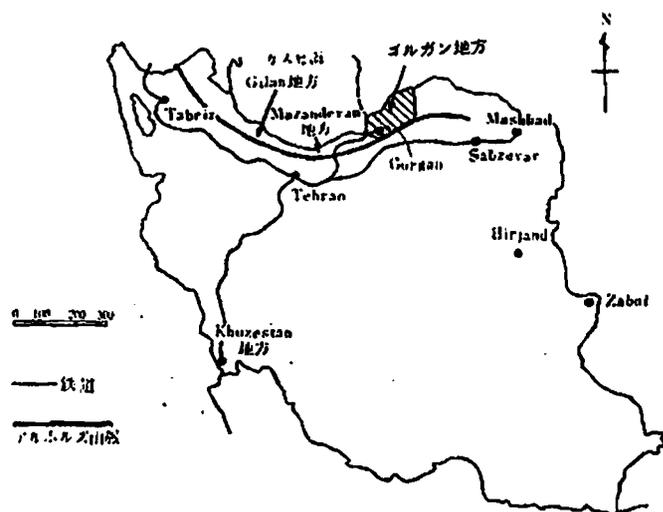
調査は1962年9月、63年3月の2回にわたって実施されたが、調査にあたって Community Development Organization の Gorgan Agency の長、Eng. Mo'tadel ならびにゴルガン地方の同 Agency のメンバーには、多大の便宜供与をうけた。ここに記して謝意を表したい。

I イランの地主

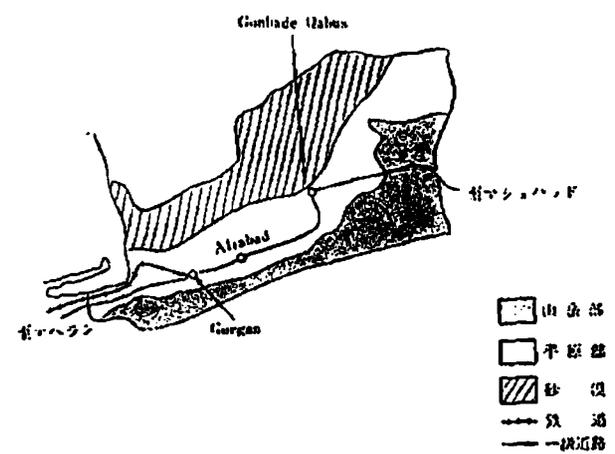
本論にはいるまえに、イランの地主は従来どのような形で農業生産の展開に関与していたかを略述してみよう。

この国の約75%の耕地は地主によって所有されているが、大別して高原地方の地主とアルボルズ山脈北側、つまり、カスピ海沿岸地方のものとは、耕地の経営の仕方、生産に対する役割の度合いに若干の差異がみとめられる。

まず、高原地方の地主は、耕地をいくつかのプロットに分け、このおのおののプロットに一定数



ゴルガン地方拡大図



の農民(註1)を配属し、かれらに協業を行なわせている。収穫は地方の習慣に応じて、収穫場において地主と農民の間で一定の割合で分益されるのが一般的である。種子、役畜、小農具などは、そのすべてを、また一部を地主が提供する場合と、農民が負担する場合とがある。また、地主が農民に対して現物、現金の前貸しをするケースも多々みられる。そのほかに、カナートと呼ばれる地下灌漑溝を保持することが、農業生産を行なうために不可欠であり、このカナートの維持に相当の出費が必要とされる。

すなわち、この地方の地主にとっては、役畜などを提供し、農民に前貸しをしている場合にはとくにそうであるが、農民が役畜などを負担している場合にも、生産に対して完全に無関係であることはできず、土地からの利潤の一部を、還元することが不可欠なのである。

しかし、地主による追加投資は、単純再生産を維持するための範囲内でしか行なわれておらず、それが経済の変動を創造するような作用を果たしているものではない。このような意味において、かれら地主は農業の動態的変動という点に関しては完全に無機能的であるといえよう。

一方、カスピ海沿岸地方においては事情がやや

異なっている。カスピ海南岸のマーザンデラン、ギーラン地方では、高原地方のように数人の農民の協業を基礎とした経営はみられず、地主は農民と個々に小作契約(註2)を結んでいる。この場合、種子、役畜などは小作人が負担しており、また、小作人に対する前貸しはなされないのが一般的である。この地方は雨量に恵まれているので、カナートなどの灌漑施設をもたずして耕作が可能であり、かれら地主にとっては、灌漑施設に対する投資は必要としない。すなわち、この地方においては、同規模の生産を繰り返すかぎり、何らの追加投資を行なう必要がないのである。一般にかれらは農業生産を増大し、より多い利潤を得ようという意欲をもたず、生産に対して何らの役割も果たさないレントナー地主となっているのである。

つぎに、ゴルガン地方についてみてみよう。この地方でも山岳部の地主は、マーザンデランの地主と同じくレントナー地主である。また、平原部においては、つぎのようである。1900年以前には、この地方ではトルコマン部族が放牧を行なっており、農耕社会の単位である村はほとんどなかった。しかし、イランを工業用原料(綿)、食糧(米)の主要な供給地としていたロシア政府(イランに作った

利権会社を通して)は、当地方の地主(山岳地方の地主とか、この地方の交易都市の商人など)を奨励し、平原地方での新田開発を促進させた。この時期に多くの地主が資本を投下して、米・綿(ロシア人の技術的指導をうけて)などを栽培するために土地の開発を行ない、多くの村が出現した。これらの地主は農業経営に対してかなり意欲的であり、従来完全に牧畜経済中心であったゴルガン平原部も、かれらの活動によりこの時期に若干の発展がみられたのである。しかし、1934年に前国王レザー・シャーがこの地方の土地をすべて王領地化することによって、かれら地主の農業発展に対する積極的な活動は姿を消すこととなった。

レザー・シャーの退位後(1941年)、王領地村の一部は元の所有者に返還され、ふたたび、地主による土地所有が始まった。しかし、かれらは以前もっていた企業家精神を完全になくしており、ただ土地からの小作料徴収のみに関心を有すレントナー地主となっていたのである。

このように、経営形態に若干の差こそあれ、本質的には農業の展開に生産的な役割を果たしていない無機能的な地主、これがイランの地主についての従来の一般的な姿であった。そして、このような地主の存在が、イラン農業の停滞の主要な要因の一つとなっていたと断言していいであろう。

(注1) 各プロットの面積、配属される農民の数は地方によって異なっている。なお、高原地方の地主の一類型については、拙稿、「イランの農村—テヘラン近郊ターレバードの事例—」、『アジア経済』、1964年2月号を参照されたい。

(注2) 小作料は定額(物納、金納)が一般的で、高原地方のように分益農やshare cropperはみられない。

II 企業家的農場“Deimikar Co.”の成立

すでにみたように、イランの農業は生産に積極

的な役割を果たさなかった地主によって担当され、そこには何らの変動もみられなかった。しかし、このような停滞的農業に大きな衝激を与える主体が1949年、ゴルガン地方に出現したのである。これは Deimikar Co. Ltd. (Dry Farming Co. Ltd.) と称する会社形態をとった農場であった。この農場は、従来の地主による経営法とは異なり、企業家的に経営されたものであった。未利用可耕地を国より借り、人力また機械力でもって開発・耕地化して、賃労働者、トラクター・コンバインなどの農業機械を使って小麦(非灌漑農法によって)の生産を行なった。従来の地主の所有する土地とは異なり、ここでは農場からの利潤はふたたび投資され、拡大再生産がはかられていったのである。

では、イランではまったく新しい試みであったこの企業家的農場は、いかなる人々によって創設されたのであろうか。また、農場設立のための資本はいかなる種類のものであったのか。まず、企業者、資本の性格よりみていこう。

この会社の設立に参加したのは7人であるが、それはつぎのような人々であった。

(1) Eng. Ibrahim Mahdavi 氏。テヘラン大学農学部卒、設立当時の Razm Aka 内閣の農務大臣、1960年第1、第2次 Sharif Emami 内閣でも農務大臣、1962年 Khuzestan 州知事などを歴任。Behshar, Birjand, Sabzevar 地方の大地主で、いわゆる千家族のなかに数えられる Mahdavi 家に属している。

(2) Asadollah Alam 氏。テヘラン大学農学部、Oxford 大学卒業、1950年の第6次 Saed 内閣で内務大臣、農務大臣、第2次 Ali Mansur 内閣で農務大臣をつとめ、農場設立時 Razm Ara 内閣では労働大臣であった。のち、1954年の第2次 Hosein Ala 内閣では内務大臣、ついで

Pablavi 財団総裁, Baluchestan 州知事などを歴任, 1962年には Ali Amini を継いで首相となるなど, 政界の要職を占め, またとくに国王の信任が厚い。父 (Shokotal Molk) は Balchestan でもっとも有力なハーンで, Alam 氏は父の遺産を継いでこの地方に広大な土地をもっている。

(3) Chaikar 氏。インド, アメリカ, イギリスなどに留学, 滞在。Khuzestan 開発会社技師。父はレザー・シャーの治世, Gilan 地方に茶栽培をもたらした。

(4) Eng. Rajidad 氏。設立当時, Gorgan 農務局長, 1951年まで。

(5) Malekpur 氏。Anglo-Iranian Oil Co. の高級社員, テヘランにおいて工場を運営していた。

(6) Haji Farzane 氏。Birjand 地方の大地主。
(7) Abizadeh 氏。大地主。

会社は上記7氏によって設立されたのであるが, ここで特徴的なことは当時の政界でリーダーシップを握っていたもの, また, 従来農業の発展には無機能的であった大地主が農場設立に参加したということであろう。

政治家(大地主でもある), 大地主, 農業技師などこの7人のグループの中で, 指導的な役割を果たしたのは, マハダヴィ農相と農業技師チャイカール氏であり, 他の5人の参画者は単に資本参加のみ行っていた。上記の2人が経営にタッチしていたが, ことにチャイカール氏は1951年会社を去るまでの2年間, 経営者の地位にあった。チャイカール氏の父はすでにのべたように, ギーラン地方に茶栽培をもたらした人で, 父子ともに旧来の農業にあきたらず新しい農業経営を行なおうという意欲をもっていた。チャイカール氏は父の導入

した新しい農業を見たほか, インド, アメリカ, イギリスなどに留学したとき, とくにアメリカ滞在中にみた近代的農業経営より強い影響を受け, イランにおいてもアメリカ式農業を行なおうという試みをもっていたようである。そして, かれによりゴルガン地方において大農経営を行なおうという発案がなされ, 強大な社会的影響力, 政治力, 大きな資本力をもつマハダヴィ氏の賛同を得, マハダヴィ氏の政治力でもって上記の有力なメンバーがそろい, イランで最初の会社形態をとる農場ができあがったのである。

では, つぎに農場設立のための資本はどのようにして調達されたのであろうか。

まず, アラム氏と最大の株主であったマハダヴィ氏の両政治家についてみると, かれらはともにそれぞれホラサーン州, パルチスタン州に広大な土地をもつ大地主であった。かれらは当時政界で活躍していたが, その政治・社会活動の経済的基盤は土地からの利潤によっていたのであり, 新農場への資本もその一部をもってあてたものと考えられる。

また, 同じ大地主であるファルザーネ, アビーザーデ両氏の場合にも, まったく前記2氏と同じことがいえる。チャイカール, ラジューダードの両氏も, 前記4氏ほどに大きくはないがやはり地主であり, その資本調達は土地からのそれ以外に考えられない。ただ, マレクプール氏の場合のみは, テヘランにおける工場経営によって蓄積されたものがあてられたといえる。

いずれにせよ, この農場を設立するための資本の大部分は, 古い型の農業経営を通じて得られたものによって構成されていたのである。

では, このようなまったく新しいタイプの農場

は何が誘因となって成立したのか。停滞的な農業の中で、この種の経済の創造を促進させた要因は何であったのか。

まず第1に、どうしてかれら政治家、大地主たちが小麦の生産を行なうために新しい投資をしたのであろうか。

イランの耕地面積の約62%は小麦栽培にあてられ、小麦がこの国農業の主要産物となっているが、第2次大戦後は需要は国内生産でまかないきれず、毎年かなりの量を輸入に頼らなければならなかった。第1表は1934年から1950年までの需給と価格の動きを示すものであるが、それによると、1944年～47年は生産が増え輸出量も減っている。しかし、農場の創立の前年1948年には国内生産が激減したが輸入量もさして大きくなく、この年にかなり大幅な価格騰貴がみられた。すなわち、表

第1表 小麦の需給と価格変動

(単位: 1,000トン)

	(A) 輸 入 量	(B) 生 産	(C)A + B 供 給 量	(D) 価 格 指 数
1934~38 平 均	-22.5	1,868	1,845.5	100 (1935年)
1939	0	—	—	160
1940	-15.0	1,500	1,485.0	170
1941	63.0	1,200	1,263.0	200
1942	32.5	—	—	620
1943	30.1	1,650	1,680.1	500
1944	11.8	2,080	2,091.8	820
1945	2.2	2,100	2,102.2	600
1946	—	2,080	—	600
1947	4.6	1,900	1,904.6	720
1948	24.9	1,550	1,574.9	1,080
1949	211.3	1,630	1,841.3	1,000
1950	107.4	2,263	2,370.4	850

(注) (D)項の数値は、折れ線グラフより再生したもので、かなりラフなものであることを断っておく。

(出所) (A)(B)(C)については *Yearbook of Food and Agricultural Statistics*, 1951 FAO より、また、(D)は、テヘラン大学 The Institute for Economic Research, の機関誌 *Tahqiqate Eqtesadi* 1962年2月号所収、Eng. Mansur Ata'i の論文「1314年~1339年(1935~1960)の小麦価格の変動」の付図1より。

(D)項によって明らかなごとく、価格は前年の720

から1080へと高騰している。今これを価格で見ると、1キログラム当たり4.3リアル(1947年)から6.5リアル^(註3)と大幅に騰貴したのである。

また、自然に恵まれ生産が順調に行なわれたとしても、絶対量は不足し、価格も上昇の傾向を示していた。このような市場条件、なかでも、1948年における価格騰貴が、資本を小麦生産のためにひきつけた一つの主要誘因と考えられる。

また、戦中、戦後におこった経済の混乱が当時まだ続いており、企業家は工業、商業部門には安定的な投資対象を求めがたい時期であった。したがって農業、なかんずく上記のような市場条件を有す小麦の生産に対する投資は、当時としてはもっとも確実な投資対象の一つであった。このような事情も、企業家に農場に対する投資を行なわせた今一つの要因になっていたのである。

この農場設立に参加した7人の企業家のうち、そのほとんどのものが広大な土地を所有し、また、既耕地以外に耕作可能な土地をももっていた。しかし、なぜかれらは自己の所有する土地で経営規模を拡大して、小麦生産を増加させようとしなかったのであろうか。少なくともチャイカール氏以外の企業者にとって未知の土地にどうして農場を設立したのだろうか。なぜ、ゴルガンがかれらの活動の対象として選ばれたのであろうか。では、つぎにゴルガン地方がかれらの資本をひきつけた要因を考えてみよう。

これにはまず、国有地また王領地という形で、広大な未利用可耕地、それも若干の土地加工で耕地化しうる土地の存在したことがあげられよう。

1934年にレザー・シャーはマーザンデラン、ギーラン地方などとともに、ゴルガン地方の既耕地、未耕地も含めすべての土地を王領地化した。1941年、レザー・シャーの即位後、王領地のうち一部

既耕地はその所有者に返還された。しかし、未利用地のすべては、従来通り王領地として残っていた。すでに述べたように、1900年以降平原部において土地の耕地化が進み多くの村が誕生していったが、依然として広大な未利用地が存在したのである。また、王領地以外にも、この地方には若干の国有地も存在した。これら、王領地、国有地で未利用地となっていたところは、そのほとんどが灌木地、沼地などで、開発にはさしたる困難性もなかった。農場の設立に参加した企業家は強い政治力をもっていたことはすでに述べた通りであるが、かれらはその政治力でもって、これら耕地化されずに残っていた国有地、王領地を獲得することができた。そして、このように新開地において農場を経営することにより、既存の耕地を農場化することによって生ずる耕作農民との間のトラブルを避けることができたのである。この農場用地として開発可能な、しかも、大規模な農場を経営するに適した広さをもつ王領地、国有地が存在したことが、これがゴルガンに農場を誘致した一つの主要な要因と考えられる。

また、王領地の存在という特殊条件のほかに土地そのものの条件とこの地方の自然環境もあげられなくてはならない。

まず、農場が使用したのは、沼地、灌木地などであり、またその上黒土質のかなり肥沃な土地であったということ、すなわち、土地の生産力がかなり高かったという恵まれた条件下にあった。

カスピ海の南を東西に走るアルボルズ山脈の南側に位置する高原地方では降雨量が少なく、また年によって降雨量に大きな変動がみられ、これが高原地方——イランの大部分を占める——の農業生産を制約する大きな要因となっている。しかし、

アルボルズ山脈の北側にあるゴルガン地方では、ギーラン、マーザンギラン地方とともに、適度な雨量に恵まれ、また年による降雨量の変動はきわめて少ない。第2表はゴルガンの雨量をテヘランのそれと比較して示したものである。年間降雨量を比べた場合、テヘランの189ミリメートルに対し、ゴルガンは539ミリメートルとなっている。このような恵まれた降雨量は、それがきわめて良好な生産条件を提供しているのである。すなわち、高原地方では、降雨量が少ない上に、年によって雨量が変化するため、カナートなど灌漑施設の整備は不可欠であり、その建設、維持のために巨額の資本が必要とされている。しかし、ゴルガンでは適度な雨量に恵まれているため、そのような高価につく灌漑施設の整備は生産を行なうために不可欠なものではない。このような良好な自然環境も農場成立の誘因となっていたのである。

第2表 ギルガン地方の降雨量と気温
(テヘラン地方との比較)

	雨量(ミリメートル)		気 温	
	ゴルガン	テヘラン	ゴルガン	テヘラン
	1946~50 の平均	1946~50年	1959	1959
1月	45	42	9.3	3.8
2月	65	18	6.3	0.4
3月	83	37	9.5	9.2
4月	54	32	17.9	18.6
5月	36	11	21.6	21.8
6月	20	1	24.7	26.7
7月	21	0	28.0	29.1
8月	35	0	27.8	30.1
9月	37	1	24.1	25.9
10月	69	0	19.0	19.2
11月	21	7	11.8	9.1
12月	53	40	8.1	3.8
計	539	189		

(出所) Arid Zone Research Centre, Iranian Rainfall Data, University of Tehran, publication No. 3. Tehvan. 1960. Meteorological Yearbook, Iran, 1959.

テヘラン、ゴルガン間(約400キロメートル)は、

軍事上の目的でレザー・シャーの時に建設された鉄道と、第1級道路によって結ばれていた。このような地理的条件は、農産物の商品化に有利な条件を与えたほか、かれら企業家のテヘランとゴルガンの双方における活動を可能ならしめたのである。

以上のべたような、土地条件（王領未利用地の存在、肥沃度）、自然環境、地理的環境などは、この地方に農場を成立させるための主要な要因であった。自然環境、地理的環境の点でゴルガンよりすぐれ、また王領地が存在したギーランやマーザンデランに農場が成立しなかったのは、大農場を営むに十分な広さの未利用地がなかったからであり、また、自然環境、土地条件においてゴルガンより劣らないダシュテ・モガーンに農場が生まれなかったのは、地理的条件が極度に悪かったからである。また、かれらが高原地方の自有地で農場を設立したり、また経営面積を増大せず、ゴルガンにおいてそれをなしたのは、自然、土地、地理条件の点ではるかにゴルガンより劣悪であったからである。

すでにのべたように、この農場は前記7氏の共同出資により1649年に成立したが、農場はアリアバード (Aliabad) の近郊 Kamaran で国有地300ヘクタールを借地し、この土地を開発して小麦栽培を始めていった。農場経営が軌道にのりや、農場よりの利潤を土地、灌漑施設などに追加投資し、農場の規模を拡大させていった。一方、最初は7人の出資者による会社形態をとっていたが、漸次共同出資者が離脱してゆき、1958年にはマハダヴィ氏の個人農場となった。

設立時より1951年までは、農業技師のチャイカール氏が積極的に経営にタッチしていたが、同氏

とマハダヴィ氏の間意見の相違をきたし、チャイカール氏は同年農場をはなれていった。ついで、ラジダード氏もゴルガン農務局長よりイスファハンに転勤するに及んで、株を当時の宮内相のホセイン・アラール氏にゆずり渡した。翌52年にはテヘランで工場を経営するヌーリー・エスファンディアアリー氏 (Nuri Esfandiari) が参加し、ふたたび出資者は7人になったが、その後、出資者の離脱が続き、農場はヌーリー・エスファンディアアリーとマハダヴィ両氏によって経営されることとなった。しかし、1959年には前者も農場経営より離れ、10年間存続した Deimikar 会社は、マハダヴィ氏の所有に帰し、ここに農場は個人経営のマハダヴィ農場となったのである。

このように農場の形態は変遷したが、その間に農場は経営規模、生産力をいっそう増大させていった。創立時には、すでにのべたように300ヘクタールの国有地の借地に成功した。この土地は以前放牧に使われており、土地も平坦で開発・耕地化にはさしたる困難も伴わなかった。トラクターを使って開発が急速に進められ、その年にはすでに秋播き小麦が作付けられている。会社名が示すごとく、この会社は当初より非灌漑農法による農業生産を主目的として発足したものであって、後に見られるような灌漑による綿花の生産をもくろんでいたものではなかった。広大な未利用地を政治力で獲得し、これを開発し、小麦を生産することが、その初期の目標であった。

この地方の土地、自然などの条件は農場経営にとり他の地方より優れていたが、ただ労働力調達点でゴルガンは農場経営に適していなかった。ゴルガンも、また隣接するマーザンデラン地方でも農民層の分解が始まっておらず、過剰人口の状態になく、この地方の農民を農場労働者として吸

収することはできなかった。そこで、マハダヴィ氏は同氏の所有する Birjand の村より農民を移住させることによってこの問題を解決した^(注4)。

1950年になると、農場はアリアバードから10キロメートルほどのところにある Hajikolate 村でワクフ地を99年契約で200ヘクタール借地した。ここには若干の既耕地もあったが、そのほとんどが未利用地であった。51年にチャイカール氏の離脱により Kamaran の300ヘクタールは同氏の所有に帰し、Deimikar 会社は Hajikolate 村のみを経営することになったが、54年になると Arazgol で500ヘクタール、Neitape で100ヘクタールの王領地を借地し、経営規模をいっきよに800ヘクタールに伸張させた。さらに小麦生産を通じて資本蓄積を続け、1957年には Badlag で王領地800ヘクタールを得たほか、それまで4台しかなかったトラクターを8台にするなど、農場の規模拡大をはかっていった。

これらの土地もすべて未利用地であり、機械力、人力でもって急速に耕地化を進めた。

綿花栽培(非灌漑による)も農場設立後数年にして始められ、しだいにその作付面積も増えていったが、農場経営の中心は小麦であり、綿花のウエイトは低かった。しかし、1957年になるとカナートなどの灌漑施設に投資し、従来の非灌漑農法を灌漑農法へと転換することになった。この土地の灌漑化とともに、綿作地を増やし綿花の小麦に対するウエイトを高めていった。

1958年にはヌーリー・エスファンディアーリー氏も農場を去り、マハダヴィ氏の個人経営となったが、この年に同氏は Sabzevar 地方の所有地でも未利用地500ヘクタールを開発して、ここに農場を設立している。また、59年にはそれまで借地していた Arazgol などの王領地1400ヘクタールを

買いとったほか、Masumabad においても王領地を150ヘクタール購入し(総経営規模1750ヘクタールになる)、従来の借地経営を所有地における経営へと切り換えている。

このように、経営規模を拡大する一方、深井戸、自噴泉、イスラエルの技術を導入した Sprinkler Irrigation System^(注5)などに巨額の資本を投下し、土地の灌漑化を急速におし進めた。

土地の灌漑化とともに、綿花の作付面積、生産は急速に増加してゆき、1963年現在小麦1000ヘクタールに対して綿作地は750ヘクタールとなっている。現在経営者の関心はもっぱら、灌漑化を進めることによって綿作地を増加する一方、施肥、農薬散布^(注6)、優等種子の導入、進んだ栽培技術の採用などを通じて単位面積当たりの収量をふやすことによって、綿花生産の増大をはかることに向けられている。また省力化^(注7)も積極的に進められ、機械力が代替しうる過程には機械が導入されている^(注8)。

このように、当初わずか300ヘクタールの土地で始められた農場は、1963年には1750ヘクタールを経営する大農場にまで進展し、また、小麦栽培中心より、綿作中心の農場となったのである。このような農場の拡大、綿作化の進展は、農場よりの利潤を再投資することによってもたらされた。また、新技術の導入も追加投資と平行して意欲的に行なわれ、農場の生産力を高めていったのである。

(注3) Mansur Ata'i, 「1314~1339年(1935~1960)の小麦価格の変動」, *Tahqiqate Eqtesadi*, p. 130.

(注4) 農場の規模拡大とともに農場労働者は増えていったが、これらは1950年代に始まった Zabol, Mashhad 地方からの移動労働者を吸収することによって調達された。なお、現在農場内で主要な地位を占めるトラクター運転者など技術関係労働者、事務職労働者、

労働者監督などは、初期に Birjand より移住してきたものによって占められている。

(注5) Sprinkler Irrigation は最初この農場に導入されたが、Mahdavi 農場の採用に刺激されその後、若干の大農場によっても採用されている。

(注6) 農薬散布は初期には人力によって行なわれていたが、ついで大型の自動噴霧器が採用された。1963年度よりは、ゴルガンにできた農薬散布を請負う会社に委託し、飛行機によって農薬散布がなされている。なお、この会社は綿織会社 Oil 会社を翼下にもつ綿花輸出会社によって設立されたものである。

(注7) 綿花栽培の始まった初期においては、農場は縮作に賃労働者を使っていたが、1959年になると、発芽後の縮作地を2〜3ヘクタールに細分し、これを常雇農薬労働者に割り当て、爾後の全労働を労働者に担当させ、収穫の一定割合(3分の1もしくは5分の2)を労賃として支払う、という方法に切り換えた。しかし、農薬散布などの過程に機械化が導入されるに及んでこの制度は廃止され、ふたたび賃労働者のみが使われている。綿花作地が増えたが、機械化が進んだため、作付面積に比例した労働者の増加はみられない。

(注8) もっとも多くの労働力を必要とする綿花収穫過程も機械化する計画が立てられており、縮摘み機の運転操作などを修得するために、農場の代理人が渡米することが予定されている。

III マハダヴィ農場成立後のゴルガン 地方農業の変容

マハダヴィ農場の成立後、これが刺激となって追従者的企業家が出現し、多くの農場が設立された。これら企業家の農場経営は自給的色彩の強かった耕作農民にも波及効果を与え、この地方の農業に動態的な変動を生み出すことになったのである。ここでは、マハダヴィ農場成立後における企業家的農場の発展と、耕作農民の変容について略述しよう(注9)。

マハダヴィ氏などのアリアバードにおける農場創設は、テヘラン在住の企業家精神をもった大地

主、商人、農業技師などにインパクトを与え、かれらによる追従がマハダヴィ氏などの農場成立の直後にあらわれた。すなわち、1950年——Deimikar Co. 設立の1年後——に、農業技師、大地主、高級官吏によって構成された Wheat Cultivation Co. が設立されたのを始めとして、ゴルガン各地にこれらテヘランの企業家による農場が生まれていった。また、マハダヴィ農場の活動や追従的に出現したテヘランの企業家による農場の活動は、小作料徴収のみに関心を示していた地元の地主を覚醒させ、かれらを農場設立へはしらせることとなった。地元の地主たちは、従来の土地を小作制によって経営するかたわら、王領地や国有地を借地して、土地を開発し新しい方法によって小麦栽培を始めていったのである。

この時期には、王領地の借地には政治力が必要であったし、また、農場経営が投資対象として安定的なものであることも証明されていなかったの、農場経営に参加した地元の企業家は、相当の資本力をもち企業家精神を有する大地主や大農産物商人(注10)に限られていた。

しかし、マハダヴィ農場や初期に出現した農場が規模を拡大し、農場経営の企業としての有利性を証明するや、地元またテヘランの企業家による農場設立が盛んとなった。また、1958年になると王領未利用地の払い下げがはじまり、農業機械化開発公社(注11)が作られ機械購入が容易になるとともに、新農場創設の動きはますます活発化した。社会的影響力、資本力ともに初期の企業家と比べ劣っていた者にも、土地入手・機械購入は容易となり、ここに多種多様な農場経営者の出現をみるようになった。すなわち、初期においては、経営者のほとんどは、大地主、政治家、大商人などであったが、この時期になると、王室関係者、退役

軍人、高級官僚、大学教授、中小商人、中小地主からゴルガン地方政府出先機関の官吏にまで及ぶこととなったのである。

このように多くの農場が生まれ、巨額な資本がその設立のために投ぜられたのであるが、資本の投下はそれのみにとどまらず、ほとんどの農場において相ついで付加投資が行なわれている。その結果、各農場の生産力が伸び、これがゴルガン地方の農業生産の著しい増大へと反映したのである。未利用地として耕地化されずに残っていた広大な土地が、農場成立によって平原部においてはほとんど耕地化したことにより、ゴルガン地方の耕地面積は増えた。耕地面積が増大したこと、また、企業家によって土地の生産性が高められる（付加資本の作用によって）とともに、農業生産に著しい伸びがみられた。とくにこの傾向は綿花生産^(注12)について顕著にみとめられ、1962年の統計によると、ゴルガン地方はイランの綿花の46%を生産するこの国の最大の綿花生産地となっている。

農場における綿作化の傾向は耕作農民にも波及効果を与えた。すなわち、耕作農民は自給的色彩の濃い農業を営んでいたが、農場の影響を受け、かれらも綿作地を増やしていった。また、新技術採用の面でも、耕作農民の資本能力の許すかぎりにおいて、かれらの企業家への追従がみられるようになった。たとえば、耕作農民による自噴泉などの灌漑施設への投資、トラクターの購入、トラクター耕耘、綿の条植などはその例といえよう。農業に対する資本の付加は、企業家のみならず従来は静態的であった耕作農民によってもなされることになったのである。

耕作農民による綿作化は、かれらを商品経済の中にまきこんでゆくことになった。現金需要は増

大し、仲介商人の介在がはげしくなり、これが耕作農民の階層分化を促進さす触媒となっている。また、かれらの中に農業機械保有農家も増えたが、耕作農民間における機械の過剰導入が原因となって、かれらの中における上昇と下降の現象が始まっている^(注13)。

(注9) この問題に関しては、後に発表を予定している報告書にて詳述されるはずである。

(注10) かれらのほとんどが、大地主でもある。

(注11) 農業機械化開発公社 (Agricultural machinery Development Bongah) は、1957年 Plan Organization の中に作られたもので、トラクターやコンバインを購入するものに4年間の融資（利子6%）をしている。トラクター、コンバイン購入者の約8割は、同公社の融資をうけている。

(注12) Mahdavi農場が小麦より綿花栽培へ転換したことをみたが、このような現象は他の農場でもおこった。また、後期に出現した農場は最初より綿花栽培を目的としていた。綿花栽培が顕著になった理由については、綿花の市場条件から説明されねばならないがこの問題については、つぎに発表する報告書にゆずることにする。

(注13) 階層分化と企業的農業の関係についての分析は、追って別の機会にまとめる報告書の中で発表する。

む す び

ゴルガン地方において、最初に成立した企業的経営としてのマハダヴィ農場の展開は、当地方における農場経営の企業としての有利性を実証するものであり、相つぐ追従者の出現を促進した。このことは、それまで、非農業部門に、また非生産部門に流出していた資本を農業に投下さすための促進的機能を果たしたという点、従来無機能であった者に、農業の発展に対して積極的な機能をもたせたという点において、この農場の先駆者的な役割が評価されねばならないであろう。

イランの農業については、発展の制度的阻因と

しての土地所有制・地主層の存在が指摘され、また、その停滞性が強調されてきた。しかし、この国の農業を停滞的なものとしてとらえ、発展の阻因=地主制の存在、という一義的規定は、もはやけって正しい問題把握を保証しえなくなってきた。というのは、一面停滞とみえるイラン農業の中にも、今まで記述したようなかなり顕著な動態

的変動がみられ、そのにない手の多くが従来農業発展の大きな阻因と考えられてきた地主層の中から輩出しているという事実、そして、この種地主の経済活動が静態的農業に動的変動をもたらす主要なインパクトとして機能しているからである。

(アジア経済研究所調査研究部第5調査室)

タイの経済開発

— アジア経済研究シリーズ 第51集 —

喜多村 浩 編

第1編 経済発展の歴史と環境

第1章 自然と環境	今泉嘉正
第2章 タイの社会	石井米雄
第3章 社会構成の変遷と華僑	石井米雄
第4章 タイの政治	関寛治
第5章 タイのナショナリズム	関寛治
第6章 第2次世界大戦までの経済および貿易構造の推移	塚田実
第7章 第2次世界大戦以後の経済発展	神谷克巳
第8章 農業の変化	塚田実
第9章 ゴム産業の発展	神谷克巳
第10章 水利開発の推移	安芸俊一

第2編 経済開発の問題点

第1章 経済開発計画の背景とその性格	神谷克巳
第2章 タイの経済開発の戦略	喜多村浩
第3章 経済開発計画の政策主体	関寛治
第4章 経済開発と教育の問題	石井米雄
第5章 タイの財政金融政策と経済開発	金成圭章
第6章 経済開発と金融の問題点	小林寿一郎
第7章 経済開発と貿易の問題点	山村勝郎・小林寿一郎
第8章 工業開発の一般の問題点	浅井敏郎
第9章 農業開発の問題点	塚田実
第10章 ゴム産業の開発とその問題点	神谷克巳
第11章 水利開発の途上から見た問題点	安芸俊一

第3編 工業投資の実態

第1章 工業の現況と今後の見通し	荒井八郎
第2章 産業助成政策とその実績	神谷克巳
第3章 タイ味の素工場の建設	浅井敏郎
むすび—タイ経済開発の展望	喜多村浩